
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 33

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 641. シンクロナイゼーションの起こる時空間を生きて
- 642. 心のゆとりと豊さ
- 643. 緩やかに進行する仕事
- 644. 新たな食生活と初期値問題
- 645. 新たな習慣
- 646. 互惠関係と知識のネットワーク
- 647. 連想的な思考
- 648. 非線形ダイナミクスの興味深い研究手法
- 649. 内側の炎の強まり
- 650. 「それ」の正体と涙について
- 651. 構造的カップリングとシンクロナイゼーション
- 652. 孤独感と連帯感
- 653. 基意志と離意志
- 654. 研究の新たな方向性とやるべきこと
- 655. 秋からの進路について
- 656. ザルツブルグでの第七回「国際非線形科学会議」へ向けて
- 657. ザルツブルグと人生の舵
- 658. きらめく星と五十代の頃
- 659. 睡眠の質とこれから
- 660. 自然からの恩恵と精神の鍛錬

単刀直入に述べると、シンクロナイズーションが絶えず生じている時空間があるような気がしてならない。そして、そうした時空間の中を今の私は生きているのだ、という実感が強くある。こうした実感をもたらしてくれたのは、一昨年と昨年の間、日本に滞在している期間に定期的に受けていたエネルギーワークのおかげだと思う。ある方のエネルギーワークを定期的に受けることによって、シンクロナイズーションが絶えず生じる時空間にアクセスできるだけの身体と精神が構築されたのだと思う。

いったんそのような器が出来上がると、その後の生活の中で、一見すると理性では解しがたい同調現象が頻繁に身に起こるようになった。その時の私はおそらく、シンクロナイズーションが絶えず生じる時空間に時折アクセスすることによって、理性の範疇を超えた同調現象を体験していたのだと思う。

しかし、もはやそうした同調現象は何ら驚くべきものではなく、常態的に体験する現象に変容したのである。言い換えると、当時の私は、同調現象が起こる空間とは異なる空間で生活をしており、時折そうした同調現象が生じる空間にアクセスしていたのに対し、今の私は、常に同調現象が起こる時空間の中で日々の生活を送っているとしか思えない、ということである。

ダイナミックシステム理論の観点から説明すると、シンクロナイズーションとは、二つのシステムが何らかの形で結びついている——カップリングしている——場合に生じるものだ。要するに、私たちが日常生活でシンクロナイズーションを実感する時、その対象と私たち自身が何らかの形で密接に結びついているのだ。

こうした説明から一気に飛躍してしまうが、二つのシステムを同調させる力を生み出す時空間の中で生活を形作ることが可能になった時、全ての事象とシンクロナイズーションを起こしうるのではないか、という極めて形而上学的な考えに至った。このような説明論理を立てておかなければ、ここ最近の私の日常で生じる現象をうまく説明することができないのだ。

日本からオランダに戻ってきた翌日の朝、さっそくある知人の方とスカイプで対話を行った。その方が対話の中で、シンクロナイズーションの話題を切り出した時、ここでも同調現象が生じていると思っ

た。二人の意識世界の中で、関心事項が共振し、対話が形作られる様子を目撃したのである。また、一昨日のヘルシンキ行きの機内の中で、あるCAの方とノルウェーの話になった。

というのも、去年の夏以降、ノルウェーという国そのものとそこにある自然に対して、何か惹かれるものがあり、欧州に戻る前日のホテルのカフェで見た、ノルウェーを特集した旅行雑誌によってノルウェーに対する想いが強まっていたのである。そして大きな偶然なのだが、そのCAの方は生まれてから12歳までノルウェーで生活をしていたと言う。その方からノルウェーについてあれこれと教えてもらったことは、また一つのシンクロナイズーションだと思う。

つくづくシンクロナイズーションとは、起こそうと思って起こせるような類いのものではないと感じる。シンクロナイズーションが生じる時空間の中で生きることができるのは、望ましいことなのかはわからない。ただし、一つだけ言えることは、シンクロナイズーションは他者との密接なつながりを感じさせてくれる現象であるがゆえに、同調現象が起こる時空間の中で生きれることは、他者とのつながりを絶えず感じさせてくれる感謝すべきことなのだろう。2017/1/9

642. 心のゆとりと豊さ

フローニンゲンに戻ってきて三日目の朝を迎える。昨日、再びこの街で地に足を着けて生きるための儀式として、ザーニクキャンパスにつながるサイクリングロードをランニングした。幾度となく眺めてきた景色が私の心を深く落ち着かせる。このランニングのおかげで、心身の状態が整ったと言える。実際に、昨日からようやく質の高い睡眠が取れるようになり、今朝は五時前に起床した。起床直後からは、これまで通りの朝の習慣的な実践を行い、もちろんオランダ語の学習も行った。

習慣的な実践を済ませると、ふと昨日の夕方のが思い出された。昨日の夕方、日本から持って帰ってきたニッサン・インゲル先生の絵画作品を梱包からほどいた時のことである。強烈な神聖さを醸し出すこの作品には、やはり圧倒されるものがあり、鑑賞中にしばしば自分がこの絵画に飲み込まれているのを実感する。より正確には、この絵画は私という存在と共振しているという点において、この作品と自己はもはや一体のものだと言っていいかもしれない。

この作品を書斎の壁に飾った時、心のゆとりと豊かさが極地に到達したように思えた。そのような心境でこの作品を眺めていると、書斎の中に鳴り渡る流麗なクラシック音楽を知覚した。心にゆとりを

もたらし、心を豊かにしてくれる絵画と音楽に囲まれながら、自分が心から望む仕事に日々打ち込むことができている。これ以上望むことは他にないのではないか。そのようなことを昨日の夕方にしみじみと感じていたのだ。

心の奥底から外側へと滲み出る幸福感を覚えた時、自分が新しいものを掴んだように思えた。それは探究活動との真の意味での一体化である。豊かさと平穏さで包まれた心のゆとりの中で、全てが自発的に進行していく感覚と表現していいかもしれない。この状態に至るまでに私は長い道のりを歩んできたように思う。

そして、ここからがスタートだという強い自覚が同時に芽生えているのだ。長らく心待ちにしていた感覚世界の中で日々を形作っていけることがどれだけ有り難いことか。この起点の芽生えによって、これまでの探究姿勢が超越され、過去のものとは違う次元の質と量を伴った探究が自ずと行われるだろう。

こうした自発的に進行する探究に到達して初めて、自分の仕事が真に深まり、一人の人間としての人格が陶冶され、世界に対する深い関与が徐々に実現されていくように思われて仕方ない。この始まりを祝い、再び着実な足取りで前に進んでいきたい。2017/1/9

【追記】

この時期から徐々に、自己の探究にのみ焦点が向かうのではなく、探究成果をもとにした世界への関与を意識し始めていることが分かる。今そこからまた次なる一步を踏み出している自分がいることに気づく。フローニンゲン:2018/4/4(水)08:29

643. 緩やかに進行する仕事

早朝の五時前後に起床すると、午前中の間にかかなり多くの仕事をこなすことができる。午前中はまず最初に、アムステルダム大学教授ピーター・モレナーの論文“A manifesto on psychology as idiographic science: Bringing the person back into scientific psychology, this time forever (2004)”を通読した。この論文は、現在履修中の「複雑性と人間発達」の第六回目のクラスの講義資料に参考文献として載っていたものである。この論文は、発達研究において、個人間の変動性

(interindividual variation)と個人内の変動性(intraindividual variation)をどのように扱えばいいのかを理解するのに有益である。

さらには、以前どこかの記事で取り上げた「エルゴード性」と「非エルゴード性」に関する私の理解をより深めてくれることに役立った。この論文を通読した後に取り掛かったのは、研究論文の執筆である。研究提案書をもとに序章を書き上げ、論文全体の大まかな構成を練った。自分の内側に学術論文の型をより強固なものとして構築するために、様々な論文の体裁を参考にしながら、論文作成の流儀と論文の骨組みを再確認していた。

自分なりの論文作成手法を体系化し、数多くの論文をコンスタントに執筆していくまでにはまだ時間がかかりそうである。今回の研究論文執筆は、論文創出に関する法則性を自分の内側で見出す貴重な機会であるため、その機会を逃すことなく、少しでも論文作成手法の体系化につながるようにしたいと思う。

論文の序章を書き終えたところで、第二章の研究方法のセクションにつなげるための項目を考えていた。今回の研究は、成人のオンライン学習をテーマとし、成人の学習プロセスにダイナミックシステムアプローチを活用するものである。第二章へのつなぎの項目として、成人学習に関する研究の現状を概観し、成人の学習は非常に複雑かつ動的なプロセスで進んで行くにもかかわらず、ダイナミックシステムアプローチを活用した研究が極めて少ないことを指摘することによって、次のセクションにつなげていきたい。

午後、つなぎの項目を執筆するための参考文献を書斎の本棚から取り出した。その専門書のタイトルは、“Complexity and Education: Inquiries Into Learning, Teaching, and Research (2006)”である。複雑性科学と教育を架橋した内容を扱う専門書を私はそれほど持っておらず、もう一冊“Complexity Theory and the Philosophy of Education (2008)”が書斎の本棚にあるぐらいだ。どちらの書籍も良著であり、今回の研究論文を執筆する上でも言及することになるだろう。

前者の書籍を数時間にわたってじっくりと読み進めていると、書斎の窓からほのかに輝く夕日が目に入った。薄くかかった雲を優しく照らす黄色い光が書斎の中に差し込み、部屋全体を静かに包んでいる。ふわりとした感覚質を持つ夕日を捉えた時、自分がフローニンゲンの街で再び生活を始

めたのだと強く意識した。自分の内側の感覚がより柔和かつ鋭敏になっていく。自分の思考の感覚がより野生的かつ理性的になっていく。

部分をより正確に捉え、全体をより正確に捉える感性が研ぎ澄まされていくのを確かに感じる。これらの変化をもたらすものは、欧州の地からもたらされる恩恵だと思っていた。しかし今となってみては、それらの変化をもたらすものは、地球の大地からもたらされる恩恵に他ならないことを知る。そうした認識上の変化を起こしたのは、年末年始の日本への一時帰国の影響が大きいだろう。2017/1/10

644. 新たな食生活と初期値問題

昨日は、フローニンゲンの街の中心部にある行きつけのチーズ屋に足を運んだ。このチーズ屋にはいつもお世話になっている。チーズ屋でチーズを購入するだけではなく、いつもナッツ類もここで購入している。毎日このチーズ屋を切り盛りしている二人の店主は、とても親しみやすい。今日も簡単に言葉を交わし、いつもと同じチーズとナッツ類を購入した。チーズ屋を出た時に、欧州生活が様相を新しくして再び開始されたことを知る。

オランダの土地で自分に合った食生活を発見し、それに忠実に従うことによって、自分の内側に一つの規則とリズムが出来上がったことがわかる。今回のチーズ屋への訪問を契機に、夕食の二時間前か夕食時にナッツ類を食べるという習慣が再び始まる。ただし、オランダに戻ってきて、食生活に関して、一つだけ変化があった。年末年始の日本への一時帰国の最中、なぜだかわからないが、サラダに使うドレッシングに注意しようと思った。

今の自宅のキッチンはそれほど大きくなく、さらにはオランダ生活の初日に見舞われたハプニングによって、自炊することはなくなった。オランダに来てから、スーパーで売られている様々な種類のサラダとチーズをローテーションで食べる食生活となっている。市販のサラダについているドレッシングがどうも自分に合わないのではないかと、という考えがなぜだか日本にいる時に降ってきた。オランダに戻って来てから早速、オーガニックのオイルを幾つか購入し、今ではそれをサラダにかけて食べている。

油を有機オイルに変えたことによって、身体の調子がとても良いように思う。どんな油を摂取するかは、身体にかなり大きな影響を及ぼすようである。身体への影響が大きいということは、精神への影響も大きいのだろう。また、日本では魚を食べる機会が多く、オランダに戻ってきてからも魚を頻繁に食べたいと思うようになった。魚を積極的に摂取するというのも、新たな食生活の一つになりそうだ。

ナッツ、サラダ、チーズ、魚を購入し、自宅に戻ってくると、再び自分の仕事を続けた。古典的な問題かもしれないが、ダイナミックシステムの初期値問題について考えさせられることがあった。ダイナミックシステムは、その初期値が変われば、後々の挙動が大きく変わることになる、という特質を持っている。そのため、初期値をいかに設定するかは、ダイナミックシステムアプローチを活用する際に非常に大切な論点である。

ここから、今自分が取り組んでいるコンピューターシミュレーションで乗り越えなければならない課題が浮上してきた。例えば、人間の知性や能力の発達に関して、理論モデルを組み立て、それを数式モデルに翻訳し、コンピューターシミュレーションをする際に、何を初期値とするかによって、シミュレーション結果が大きく変わってしまうのである。

ダイナミックシステムアプローチは現在、経済学、脳科学、生物学などに積極的に活用されているが、コンピューターシミュレーションを用いて正確な将来予測をすることはどの分野においても頭を悩ませる問題になっている。それくらい、ダイナミックシステムの挙動を正確に予測するのは難しいのだ。特に、長期的な予測になればなるほど困難さが増す。なぜなら、初期値にごくわずかな差があった場合、短期的にはその影響はそれほど見られないことが多いが、時間軸が伸びると、初期値のごくわずかな差が必ず将来の大きな差として現れるからである。

そのようなことを考えながら、再び自分の食生活に思いを巡らせていた。ある意味、欧州での生活を改めて始めた今は、食生活の初期値を設定し直す優れた機会だと思うのだ。幾つかの有機オイルと魚を取り入れた食生活によって、今後自分の身体や精神にどのような影響があるのかをつぶさに観察したいと思う。2017/1/10

【追記】

この時期から食生活を変えた。特に有機オイルを毎日使うようになったことは心身の健康に少なからぬ影響を与えているように思う。この時はまだ自炊を開始していなかったが、今年の年初から再び自炊を始めた。自炊と言っても米国時代の生活と同様に、オーガニック野菜をふんだんに使ったカレーしか作らない。米国時代の食生活と違うのは、米国においては昼も夜もカレーだったが、今は昼は大きなサラダだけを食べ、夜にチーズとカレーを食べるような食生活になっている。この食生活に改めてから、毎日がさらに充実したものになっている。やはりどのようなものをどれだけ食べるかというのは心身への影響に加えて、日々の生活の質に大きな影響を与えるのだと思う。フローニンゲン:2018/4/4(水)08:43

645. 新たな習慣

今日は早朝から雨がしとしとと降り注いでいる。午前中の仕事をあらかじめ済ませ、書斎の窓越しにひじかけながら、景色をぼんやりと眺めていた。一息入れたいとき、私は書斎の窓から見える景色にいつもお世話になっている。窓から見える景色は、抽象世界から私を物理世界へ連れ戻してくれるのだ。

日々の探究と仕事は、常に私を言語世界の中に招き入れる。言語世界での活動に一息入れたいときに、書斎の窓から見える景色はまさに私を休息状態に導いてくれる。書斎の窓から見える景色は、めばしいものは特に何もないのだが、逆にその簡素さが私を深く落ち着かせるのかもしれない。綺麗に整備された道路と赤レンガの家々を中心に、開放的な空が見える。

そして、この時期には枯れてしまっているが、街路樹もまたこの景観になくてはならない存在である。そうした景色の中に、時折嬉しい訪問者がやってくる。それは窓越しに姿を表す小鳥たちであったり、大空を優雅に群泳する中型の鳥たちである。こうした何気ない景観と動植物に私はどれだけ支えられていることか。それらの支援のおかげで、日々の生活が調和を成しながら縁取られていくのである。

オランダに戻ってきて、食生活を少し見直したことを紹介したように思う。基本的に朝の食事には何ら手を加えていない。前日の仕事の負荷により、朝は五時か六時に起床するのが習慣であり、起床

直後に二杯の水を飲む。そして朝の習慣的な実践を行った後に、一杯のお茶を飲む。そこから、七時半にスムージーを飲み、八時半あたりにリンゴ一個を食べ、十時前にバナナ一本を食べるということが朝の食事となっている。

新年を迎え、気持ちを新たにしようとする無意識的な働きかけがあったのだろうか、今日からなぜだか、リンゴを食べながらメールをチェックする習慣を破棄した。これまでは早朝に一度メールをチェックし、昼食後にメールを再度確認するというを行っていたが、早朝にメールを確認することはやめようと思った。朝の時間帯にメールを確認しなければ、余計な思念に囚われことなく、集中して探究や仕事を進めることができるように思う。今朝から何気なく始めた習慣は、リンゴを食べながら書斎の壁に飾っている絵画作品を鑑賞することである。

絵画作品の鑑賞と言っても、リンゴをかじりながら二つの絵画を何も考えずに眺めているだけである。本来であれば、リンゴを食べることに意識的になった方がいいのかもしれない。しかしながら、リンゴを食べる行為と絵画作品を眺める行為は、とても良い調和を成し、深い休息を私にもたらしてくれるように思った。少なくとも、リンゴを食べる行為とコンピューターを眺める行為との相性よりも格段に優れたものであることは確かである。

ニッサン・インゲル先生の作品を、今回の一時帰国の際に受け取ることができて本当に良かったと思っている。先生の作品が持つ変容と癒しの力にいざなわれて、こうした新しい習慣が生み出されたのかもしれない。2017/1/11

【追記】

「朝は五時か六時に起床し、起床直後に二杯の水を飲み、朝の習慣的な実践を行った後に、一杯のお茶を飲む。そこから、七時半にスムージーを飲み、八時半あたりにリンゴ一個を食べ、十時前にバナナ一本を食べる」という行動様式はずっと継続している。ただし、今は起床直後に飲む水の量はコップ1.3～1.4杯ほどの分量だ。それ以外には上記の記述は今も当てはまっている。

また、最も重要な習慣は、朝にメールを見ないということだろう。これをしないだけで、どれだけ自分の仕事に集中できるかは計り知れない。人々の意識が自分の内側ではなく外側に向かい、自分の存在を通してこの世界に何かを創造するのではなく、何かを受け取ることだけが常態化してしまう

ているのは、一つにはこうしたEメールなどの煩わしいツールが生まれてしまったためだろう。フローニンゲン:2018/4/4(水)08:52

646. 互恵関係と知識のネットワーク

今日は早朝から雨が断続的に降っていた。時折太陽が雲間から顔をのぞかせると、幻想的な光で辺りが照らされていた。昼食前に晴天になったかと思うと、午後から天候が一転して、激しい風と共に雨が窓ガラスに打ち付けられている。二転三転変動する天気を見ていると、もし目に映る天気のことを天気だと思っているなら、それは認識上の大きな過ちであると思った。

外側の世界の天気は、外側の世界の天気にとどまらない。言い換えると、外側の世界の変化は、そっくりそのまま内側の変化そのものを指し示すものだということだ。そのようなことを思いながら、簡単な思考実験を試みた。外界の天気を一切変化のない状態に固定してみるとどうだろうか？固定された天気は、私たちの内側にどのような影響を与えるだろうか？

天気に一切の変動がないとなると、私は気が滅入ってしまうだろう。なぜなら、内側の流れは絶えず変化しており、仮に外側の世界の流れが固定化されてしまうと、内側の流れそのものにも淀みが生じると思うからである。内側の流れに淀みが生じているというのは、精神生活上、非常に不健全な状態だと言えるだろう。私たちが絶えず内側の変化の流れの中で生きられるというのは、もしかすると、外側の世界の絶え間ない変化の流れに恩恵を受けているからなのではないだろうか。

同時に、外側の世界が絶えず変化を生み出しているというのは、私たちの内側の世界の絶え間ない変化の流れに恩恵を受けているからなのではないか、と思った。つまり、内面の世界と外面の世界は、両者が共に変化を生み出す主体として互恵関係を結んでいるようなのだ。ここから得られた発見は、日々の変動する天気は私の変化を支えており、私の変化は天気の変動性を支えているということだ。もちろん、私の変化が直接的に天候の変化に影響を与えるわけではない。しかしながら、天気が絶えず変動する姿として存在するためには、私の認識上の変化が必要なのだ。そのような互恵関係が、天気と私の中で結ばれている気がしてならない。

午後より、昨日から読み進めていた”Complexity and Education: Inquiries into Learning, Teaching, and Research (2006)”に目を通していた。その中でも一つ私の関心を捉えたのは、ダイナミックネッ

トワーク理論の一つの考え方であった。中心に一つのハブを持つネットワークは、そのハブが機能しなくなると、ネットワーク全体が機能なくなってしまうため、非常に脆弱である。一方、一つのハブにネットワークのリンクが偏らない脱中心的ネットワークの方がより強靱であるということを学んだ。

ここから知識体系の構築について思いを巡らせていた。一つの専門性しかない知識のネットワークは、一つのハブに依存しているがゆえにとっても脆弱である。そのため、脱中心的な知識のネットワークを構築することが望ましいような気がしたのだ。当然ながら、一つの専門領域を深く掘り下げ、知識体系をより高度にしていく試みは依然として重要である。しかし、そうした試みに並行して、一つの中心に依拠するのではなく、知識のネットワークを脱中心化するべく、複数の専門領域を構築していくことがやはり重要であると思ったのだ。

確かに、複数の専門領域を持つことの重要性は様々なところで提唱されている。ただし、これまで様々な議論を見てきた限りでは、ネットワークの脆弱性の観点から複数の専門領域を持つことの重要性を指摘しているものはほとんどなかったように思うのだ。自らの知識のネットワークの中で、一つの点を高度化させていくことだけでも骨が折れるが、それに加えて、複数の点をより高度なものにし、それらの点を結び合わせるような試みを果敢に行っていきたいと思う。それができて初めて、徐々に強靱な知識のネットワークが構築されていくのだろう。2017/1/11

【追記】

自らの探究領域が多岐に渡っているということ、それぞれの領域を時間をかけてゆっくり深めたいということ、独学と学術機関に所属する形での探究を継続して進めたいという思いから、今後も今のような方法で自身の探究を進めていくことになるだろう。上記で言及しているネットワークの強固さと脆弱性の観点からも、複数の専門性を獲得し、それを磨いていく試みにこれからも従事したい。四つ目の修士号と二、三の博士号の取得を視野に入れているのはそのためだ。

以前の私が感じていたような、知識体系の構築に対する焦りや切迫感のようなものはもはやない。もはやそれらを構築するためには長大な時間の流れに自己を晒すことが重要であり、急いでも何も積み重なっていかないことが明らかなからである。焦りの中で進める探究ほど浅薄なものではなく、そこで構築される建造物もまた浅薄なものになるに違いない。最後に、自分はまだ何も学んでいない

ということだけを付け加えておく。四つ目の修士号と一つ目の博士号を取得してから真の探究が始まる。フローニンゲン:2018/4/5(木)08:35

647. 連想的な思考

昨日から本格的に探究活動と仕事が再開された。日本に一時帰国する前と比べて、活動内容自体に変わることは何もない。ただし、活動への向き合い方と進め方に変化が見られるのは確かである。これまで以上に平穏な心の状態の中で活動と向き合い、大きな全体を見通しながら活動が進められているという違いがある。印象的だったのは、学術論文や専門書の中で記述されている言葉の捉え方である。

当然ながら文献の細部を理解するために、焦点を狭めることがあるのだが、焦点を狭めたとしても常に全体が自分の内側に流れ込んでくる感覚があるのだ。つまり、部分に着目しながらも全体が把握できているという感覚だ。そこからさらに、一つの文献が生み出す言語世界や情報世界を一飲みにしているような感覚も自分の中で生じている。このように、部分に焦点を当てながらも、それらの部分が寄せ集まったものを超えた形で生み出される全体を把握できているのは、自分の中に新たな眼が獲得されたこととも関係しているだろう。

新たに獲得された眼の真価は、自分の内側の世界をこれまでとは違う次元で把握するためのものだ。しかしながら、今はその真価を発揮するところに至っておらず、外側にある情報世界を見通すことに効力を発揮しつつある。そのようなことを感じている。

昨日の文献調査の中で出会った、「人間は論理的な生き物というよりも、連想的な生き物である」という言葉が依然として頭から離れない。確かに私たちは、論理を司ることができるが、近年のコンピュータの発達に伴い、論理思考に関しては、コンピュータの方に軍配が上がるように思う。私たちが自分の頭で論理を積み重ねていくことには限界があるとつくづく感じる。これは、現在ダイナミックシステムアプローチを活用したコンピューターシミュレーションなどを行っていると特に実感することである。

動的なシステムの複雑な挙動を考える際に、私たちが発揮する論理思考では心もとないのである。一方、私たちは、優れた連想的思考を発揮することができる。今のところ、これはコンピューターではなかなか真似のできないものだということをよく耳にする。

私たちが連想的思考を発揮できる背景について少しばかり考えていた。一つには、私たちは日々、無数の意味の網の目に組み込まれて生きているからなのではないか、と思った。無数の意味の網の目の中で生きるためには、網の目を柔軟に行き来することが求められる。逐一、論理を使っている、この網の目を自由に移動することに不都合が生じるように思うのだ。

さらには、私たちが日々の生活の中で獲得する意味は、複雑な網の目の中で入れ子状になっており、それらを論理を用いて解きほぐしていくことは至難の技である。論理を用いるのではなく、連想を用いることによって、私たちは意味を理解し、意味を生み出しているのではないかと思う。

冒頭で言及した、全体を把握する眼というのは、多分に連想的な思考と関係していると思った。オランダに戻ってきてから、一つの文献が生み出す言語世界と情報世界の全体を論理的な思考を用いて把握しているというよりも、連想的な思考を用いて把握していることに気づいたのだ。確かに、細部の情報を理解するときには論理的思考が働いているだろうが、全体を把握するときには連想的思考が働いていることがわかる。そうでなければ、全体を一挙に捉えることなどできないだろう。

論理を積み重ねていくことは、どこまでも部分を積み重ねていくことに等しく、そうしたアプローチでは、部分を超えた全体を把握することは到底できない。また、興味深いのは、部分を捉えるために論理的思考を働かせている時ですら、その背後には必ず連想的思考が息づいているのを感じるのだ。こうした連想的思考を用いて、より大きな知識体系のネットワークを自分は構築しようとしているのだろう。2017/1/12

648. 非線形ダイナミクスの興味深い研究手法

いよいよ今日から2017年の学期が始まった。今日はフローニンゲンに戻ってきて初めてのクラスがあった。具体的には、「複雑性と人間発達」というコースの第六回目のクラスである。早いもので、全七回のクラスのうち、今日のクラスを除けば残すところあと一回のクラスとなる。自宅を出発し、講義が行われる社会科学学科のキャンパスまで歩いている最中、常に私は意気揚々としていた。おそら

くこれは、新年を迎え、気持ちが新たなものになっていたからかもしれない。また、日本に一時帰国した際に、色々と思うことや掴んだことがあったためかもしれない。

いずれにせよ、自分の探究と仕事に専念できる素晴らしい環境の中に再び戻って来れたことが、何にも増して嬉しかったのだ。このような内側からほとばしる歓びを噛み締めながら、ノーダープラントソン公園を横切り、キャンパスに着いた。

本来であれば、今日は「リサンプリング」という手法を習う予定であったが、コースの内容が入れ替わり、三人の博士課程の者たちの研究発表を聞いた。その中でも、ダイナミックシステムアプローチを発達研究に本格的に導入したポール・ヴァン・ギアートをアドバイザーに持つ一人の博士課程の研究者の発表が印象に残っている。

彼女の研究は、子供たちのジェスチャーと発話の発達レベルの関係性を調査するものである。彼女は、カート・フィッシャーのスキル尺度をもとに、ジェスチャーと発話のレベルを評価し、それらのミスマッチやシンクロナイズーションが起こる要因を特定しようとしていた。私もフィッシャーのスキル尺度を用いる研究をしているということや、シンクロナイズーションという現象に着目をしているため、彼女の発表を終始興味深く聞いていた。さらに彼女は、「交差再帰定量化分析」という非線形ダイナミクスの一つの研究手法を用いており、その活用可能性について垣間見ることができた。

そしてもう一人印象に残っているのは、最後の発表者である。特に私の関心を引いたのは、彼が研究の中で扱っていた非線形ダイナミクスの手法であった。それは以前紹介した「ターケンスの埋め込み定理」と関連するアプローチであり、「SMAP」と呼ばれるものである——残念ながら日本語訳はわからない。彼がイメージ図を用いながらビジュアルに訴えかける説明をしてくれたおかげで、何をやっているかのイメージを掴むことができた。

その背景にある数学的考え方をまだ理解していないが、このアプローチが非常に面白いものであり、将来の自分の研究に役立つものであることが直感的にわかった。記憶に残っている情報をもとに、どのようなアプローチだったのかを書き留めておきたい。

一つの時系列データを行列に変換し、それを状態空間の中にベクトルの形でプロットしていたのを記憶している。そこから「bundle embeddings」という考え方をを用いて、一つのベクトルを二つのベクト

ルに分割し、両者の挙動を分析するものだったと思う。記憶に残っているのは、こうした抽象的なイメージと研究手法の名前だけだが、発表を担当したバートに参考論文をいくつか紹介してもらった。後日、この研修手法の背後にある考え方と活用方法について自主的に理解を深めていきたいと思った。

今日のクラスの最後に、私の論文アドバイザーでもあり、コースを担当しているサスキア・クネン先生から、「非線形ダイナミクスの研究手法は、ほぼ毎年新たな手法が生み出されているが、今回のコースで取り扱った種々の研究手法に習熟すれば、それらの新しい研究手法を比較的容易に理解することができる」というコメントがあった。

実際に、このコースのおかげで、非線形ダイナミクスの様々な研究手法に触れることができ、それらはどれも私の関心を大いに引くものであった。それらの研究手法は、知性や能力の発達を研究する上で非常に有益なものなのだ。クネン先生の言葉にあるように、非線形ダイナミクスの研究は日進月歩で進んでおり、この研究領域に身を置くことは大変面白い。数学的な素養をさらに高める努力を怠らず、非線形ダイナミクスの考え方や研究手法の理解を深め、今後の自分の研究に是非とも応用していきたいと思う。2017/1/12

649. 内側の炎の強まり

この日は、「複雑性と人間発達」というコースの最後のクラスに参加した。教室に到着してすぐに、このクラスの様々な受講者と挨拶を交わした。話題は極めて単純であり、お互いがどのように冬休みを過ごしたか、というものである。このクラスをいつも私は、博士課程に在籍するドイツ人のヤニックと心理学科に在籍するピーター・デヨング教授と隣り合わせの席で受講している。

いつもは私が二人の間に座る形だが、今日はデヨング教授の横の右端の席に座った。以前紹介したように、このコースは修士課程の者だけではなく、博士課程に在籍している者や、ダイナミックシステムアプローチに関心のある教授たちが受講している。そうした教授たちの一人に、デヨング教授がいる。デヨング教授は非常に気さくな方であり、雑談にいつも花が咲く。私が日本に一時帰国した話をすると、デヨング教授はまだ日本に行ったことがないらしく、いつか自分を日本へ招待してくれと冗談交じりに述べていた。

いつになるのかわからないが、もし私がいつか日本の大学に籍を置くことになった時には、デヨング教授をはじめ、フローニンゲン大学に在籍する優秀な教授や研究者を招待したいと思う。そのような日が来ることを、今からとても楽しみにしている。

今日のクラスが終了したところで、図書館の中で少しばかり振り返りを行っていた。今日のクラスの振り返りというよりも、このコース全体を通じて得られた学びに対する振り返りと、最終試験に向けて自分がしなければならないことを明確にしていたのだ。特に、最終試験に向けて自分が取り組まなければならないのは、このコースで取り上げられた全ての研究手法に関する内容を整理し、それぞれに対する理解を深めることである。このコースでは、非常に多くのダイナミックシステムアプローチの研究手法を学んだ。

それらの研究手法をどのような目的で活用するのかを明らかにし、それらの研究手法はどのような研究上の問いに答えることができるのかを明確にしておく必要があるだろう。それぞれの研究手法が光を当てることのできる問いを明確にし、それらの研究手法を活用する目的が明らかになれば、今私が取り組んでいる研究の中で、早速それらの研究手法を活用することにつながるだろう。私が研究の中で取り組みたい問いと、それらの研究手法が明らかにすることのできる問いとが合致していれば、今回の研究の中で、積極的にそれらの研究手法を活用していくつもりである。

今回執筆する論文は、あくまでも今後の査読付き論文へと発展させるための土台となるようなものにしたいと思う。少しばかり野心的な修士論文になるかもしれないが、非線形ダイナミクスのような研究手法の応用可能性を探る裾野の広い研究としていきたい。

明日から二月の最初の週に行われる最終試験に向けて、これまでの学習内容を咀嚼し、それらの知識が自分の研究や実務の中で生きるような次元に昇華させていきたいと願う。その実現に向けて、まずは学習した様々な概念の理解を整理し、特に非線形ダイナミクスの研究手法の活用目的と活用方法について明瞭な説明ができるようにしておきたい。今日のクラスを通じて、自分の内側の炎が、確信を伴って一段とその勢いを強めたことを実感する。2017/1/12

きつとあるに違いない。そのようなことを確信させる出来事であった。前々から気づいていたのであるが、毎日書き留めている日記は日々の雑感に他ならないにもかかわらず、理由の定かではない涙が込み上げてくるような文章があるのだ。その涙は、昨年日本でブームになった『君の名は。』の中で、主人公が流す涙と性質を同じにしているかのようである。自己を超越した存在に私たちが触れる時、自己は大いに揺さぶられ、その振動が私たちの奥深くから涙を湧き上がらせているのではないか、と思わずにはいられない。

自己を超越した存在は、自分とは異質の存在である場合もあるだろうし、今の自分を超越した大いなる自己の場合もあるだろう。いずれにせよ、私たちが自分自身を遥かに凌駕した存在と内面世界で出会う時、理由が確かではない涙が自然と流れてくるのではないだろうか。

先日、日本に一時帰国している最中、日本橋を歩いている時に込み上げてくるものがあつた。また、隅田川をかける橋を渡っている時にも得体の知れない込み上げてくるものがあつたのだ。これらの現象に共通していることは、疑いようもなく、自己を超えた存在との邂逅であつた。

振り返ると六年前に母国を離れて以来、私は頻繁に内側から込み上げてくるものを知覚するようになっていた。実際に、人目をはばからず涙を流すこともあり、同時に、一人で涙を流していることが頻繁にあつた。それは予期せぬ涙であり、きっかけはいつも些細なものなのだ。何気なく道を歩いている時であつたり、人との何気ない会話の最中に、「それ」は突然やってくる。

もしかすると、自己を超越した存在は、自己を超越しているがゆえに、自己のすぐそばにいつも寄り添っているのかもしれない。ただ単に、私たちがその存在を認識できていないだけなのかもしれないと思う。日常の何気ない活動を通じて、それと触れ合い、それを感じることができるというのは、私たちが人間として深く生きていく上で非常に大きな意味を持つだろう。そして、それとの邂逅によって自然と流れてくる涙は、自己を超越した存在との出会いの証であり、大いなる存在と触れた証なのだと思う。

その時に湧き上がる感情は、最も原始的なものでありながらも、最も高潔なもののように私には思える。自己と自己を超越したものとのつながりから生み出される感情は、私が最も大切にしたい感情の一つだと言える。

自分の過去のたわいのない日記を読み返してみると、文章を執筆する過程で涙を流していることがある。同時に、そうした文章を読み返してみても、ごまかしようがなく込み上げてくるものがあるのだ。なぜ自分が紡ぎ出した言葉に対して、私自身が感極まることがあるのか不思議でならなかった。その理由の一つは、上記で言及したように、文章を執筆している最中の自分が自己を超越した存在と触れ合っているからなのだろう。

そして、もう一つ大事な理由がある気がしてならない。自己を超越した大いなる存在は、概念が生み出される世界よりも一段深い世界に私たちを誘うような気がしている。それは言葉の故郷とも言えるような場所であり、概念の故郷と呼んでもいいかもしれない。いずれにせよ、それは言葉の世界よりも深い世界であり、その世界の感覚や感情が言葉の形として誕生するその瞬間に、私たちは感極まるのではないかと思うのだ。

それは産みの苦しみを超越した産みの喜びと感謝の念に近い。それは、自分の子供が誕生した時に込み上げてくるあの感情に近いのかもしれない。そうしたことから、この感情は、人間として生きる私たちにとっての普遍的な性質を帯びているように思うのだ。私たちが何かに打たれる時、大いなる存在と触れ合う時に込み上げてくるその感情は、言葉よりも深く、言葉の故郷から生み出されるものなのだろう。私が真に望むことは、絶えずそれを通じて日々の生活を送ることであり、それを何らかの形で表現していくことである。この想いが、私の全ての探究と仕事を根幹から支えてくれるものなのだと思う。2017/1/12

【追記】

この日記を読みながら、合点の行くことがあった。私が日々日記を綴り、作曲実践に打ち込んでるのはそのような理由があったのだ。言葉よりも深い世界に触れ、自己を超越した存在に触れ、そこでの交流によって喚起された言葉と音楽を形にすることが自分にあたえられた役割であり、使命なのだと改めて思う。言葉の世界よりも深い世界と自己を超越した世界に触れながら、日々の創造的な仕事に取り組んでいこうとする意思が今一度再燃した。フローニンゲン:2018/4/5(木)09:03

第六回目の「複雑性と人間発達」のクラスが終わり、私は図書館に向かった。図書館で幾つかの論文をプリントアウトし、そのままその場でそれらの論文に目を通していった。年代としては少し古いが、“Science and Complexity (1948)”という論文を読みながら、考えさせられることがあった。私は現在、科学者という立ち位置と実務家という立ち位置を取りながら日々の探究と仕事を進めている。

それは多分に、元々経営コンサルティングに携わっていたというこれまでの自分のキャリアから影響を受けているだろう。それ以上に重要なのは、それらの両方の立ち位置を取ろうとする自分の内側の想いかもしれない。

論文を読みながら、科学的な研究というのは記述的なアプローチで世界に関与し、実務家としての仕事は規範的なアプローチで世界に関与することなのだ、ということを改めて思った。私はどちらかに偏るのではなく、その両者に携わっていきたいという想いがどうしてもある。どちらのアプローチも固有の観点と方法で世界に関与していく道に他ならず、その一方の道を辿ることに対して、私は強い違和感を覚えている。二つの道を同時に辿り、両者の道を開拓していくことにどれだけの困難がつきまとったとしても、私は二つの道を通じた世界への関与を行っていきたく強く思う。

そのようなことをこの論文を読みながら考えていた。論文から目を離し、時計が示す時刻を確認すると、年末に私が行ったのと同様に、同じプログラムの他の学生が研究の中間発表をする時間が近づいていた。そのため、図書館をあとにし、発表会場に向かった。今回の発表を担当したのは、六人の修士課程の者たちである。最初の発表者は、私の親友でもあるエスターだった。彼女とは時折情報交換をし、事前に彼女の研究内容について知っていたのだが、改めて発表を聞くことによって、色々と明確になる点があった。

何よりも私が感銘を受けたのは、発表後の教授陣との応答だった。前にも紹介したように、彼女は元々、天体物理学を専攻しており、非常に鋭い知性を持っている。今日も同じクラスに参加していた時に、私の理解が追いつかない内容をいとも簡単に理解し、説明を行っていた博士課程の者に対して的確なコメントを投げかけていた。同様のことを、教授陣を相手に行っている様子を見たとき、感化されるものがあった。

エステーの発表に続いて行われた研究内容はどれも、研究結果が待ち遠しいと思うようなものばかりであった。特に、最後の発表を担当した私の友人であるドイツ人のジェレミーの研究はとても面白い。彼の研究テーマを一言で述べると、「同調現象(シンクロナイズーション)」である。より具体的には、二人のボート選手のボートを漕ぐ動きがどのようにシンクロナイズーションするのかを調査するものである。

シンクロナイズーションは、今の私にとって、なぜだかとても気になる現象だということを以前言及したように思う。二つの動的なシステムが結びつくという「カップリング」を起こす時、二つの構造的にカップリングされたシステムはシンクロナイズーションを起こすと考えられている。そうだとするならば、この「カップリング」という現象がどのように発生するかメカニズムがわかれば、シンクロナイズーションという現象をうまく説明できることにつながり、システム間でシンクロナイズーションを生み出すことにも応用できるように思うのだ。

私たちの身の回りにシンクロナイズーションを示す具体例は多々ある。興味深い現象としては、二人の女性が一緒に生活を始め、二人が構造的にカップリングされれば、二人の生理周期が同調し始めるというものがある。二人の人間は基本的に異なる変動性を持っているが、ジェレミーの仮説と同様に、シンクロナイズーションが起こりやすい波形があるような気がしている。その最有力候補は、変動性が激しすぎず、また安定的すぎないピンクノイズだろう。

もしかすると、ピンクノイズを発する二つのシステムはカップリングを起こしやすく、結果としてシンクロナイズーションを起こすのではないか、という仮説が浮かぶ。ジェレミーの研究結果がどのようなものになるのかとても待ち遠しい。2017/1/12

652. 孤独感と連帯感

昨日、フローニンゲン大学の社会科学キャンパスから自宅に帰るため、ノーダープラントソン公園の中を通った。これはいつもの通学路である。公園の中心部にある池に差し掛かった時、大量の鳥が群遊していた。どうやら、池の近くにいる通行人が鳥たちに餌をあげているようである。鳥たちの鳴き声は威勢が良く、多くの白い鳥たちがノーダープラントソン公園の空を舞う姿は、少しばかり壮観ですらあった。ところが、私の関心を引いたのは、それらの鳥の群れではない。

池の端っこに、一羽の鳥がたたずんでいるのを見つけた。その鳥は、仲間の鳥たちの姿を静かに見つめている。その姿はまるで、保護者のようであり、その達観した様子が幾分滑稽であった。実際に、私はその鳥を見て思わず微笑んでいた。その微笑みは、その小鳥の達観した姿からもたらされたものであり、同時に、その鳥に対する共感の念からもたらされたものでもある。

池から公園の外に向かって伸びる一本の小道を歩きながら、決して群れることのないその鳥の中に、孤独の真髄を見たような気がした。孤独という現象については、随分と前に何かを書き残していたように思う。その鳥から考えさせられたのは、真の孤独さを自己の内側に見いだすことの困難さと大切さである。真の孤独さとは、徹頭徹尾、自分が何者にも代えがたい個として存在していることの自覚だと言い換えていいかもしれない。

この自覚を持つことがいかに難しいことか。そして、その自覚がいかに私たちの内面の成熟を促すことか。私たちが真に自己の孤独さに目覚める時、そこで初めて自分が孤独ではないということを知る。これは逆説的に響くかもしれない。だがそれは、紛れもない一つの真実として自分の中で経験されつつあることなのだ。自分という一人の人間が代替の利かない個としてこの世界に存在していることを真に自覚する時、その個を個たらしめているのは、その個を取り巻く他の存在なのだ。

ここで述べている他の存在とは、他の人間を含むのみならず、文化や環境などを当然ながら包摂している。欧州で日々の生活を形作る今の私は、時に押し潰されそうな孤独感に苛まれる。同時に、自分を取り巻く全ての存在との恍惚的なまでの一体感を感じることもあるのだ。真の孤独感とは、他の存在との真の意味での連帯感に他ならないのかもしれない。そのようなことをノーダープラントソン公園の池にたたずむ一羽の小さな鳥から教えられた。2017/1/12

653. 基意志と離意志

今日は、朝から激しいみぞれが地面に打ち付けていた。そして、ある時を境にして、みぞれから雪に変わり、書斎から見える景色が瞬く間に白銀世界に変貌した。一向に止むことのない雪により、白銀世界がより一層白味を増していく。今の時刻は朝の九時半にもかかわらず、辺りは夜に向かう雰囲気を醸し出している。これが北欧に近いオランダ北部の冬の姿なのだろう。

外の雪景色を眺めながら、ふと昨夜の夢の内容が思い出された。その夢の核をなす伝言は、「できるだけゆっくりと自分の内側に知識と経験の広いネットワークと高い体系を構築せよ」というものであった。

人間の発達に関する研究や実務に携わってしばらくの時間が経ったが、私たちはつくづくゆっくりとしか成長しない生き物なのだと思うされる。成長の瞬間は確かに突発的である。しかし、そうした突発的な成長に至るためには、長大な時間を重ねる中で多くのことを積み重ねていくことが何よりも重要なのである。束の間の超越体験や刹那的な変容体験を求めてはならない。それらの体験は、瞬間的な高揚感をもたらし得るが、永続性はなく、それらが真の自己変容につながることはほとんどないのだ。

ダイナミックシステム理論に真剣に取り組むことによって、成長や発達の要諦は、つくづく日々の規律さと勤勉さであるような気がしている。私たちの知性や能力は、動的なシステムと見立てることが可能であり、そうしたシステムが発達するためには、目には見えないところで確かに進行している変化の積み重ねが何よりも大事なのだ。

日々の一つ一つの行動や学習は、それ自体は何の変哲も無いものかもしれない。しかしながら、それらを積み重ねていく過程の中で、システムに「強化型フィードバック(ポジティブフィードバック)」が生み出される。強化型フィードバックとは、ひとたび形となった小さな雪だるまが斜面を転がる中で爆発的にその大きさを増していく「スノーボール効果」と同義である。自己の内側で知識や技術の体系を形作るためには、何も目新しいことをする必要はない。

必要なのは、何の変哲も無い日々の実践を思慮を持って愚直に継続させていくことだろう。私たちが規律さと勤勉さを持って何かに取り組むとき、必ずや自分の内側に大きな雪崩のような現象が起こる。それは何かの崩れ去ることを示すものではなく、全く逆に、巨大な雪の塊が形成されていく姿を示している。そのようなことを考えていると、いつの間にやら、雪が止み、空から太陽が現れ始めた。

太陽の手招きに応じて、私は自宅を後にし、ランニングに出かけることにした。先ほど降り積もっていた雪を踏みしめながら、私は一つの方角へ走り始めた。自覚的に走ることを決意し、無自覚的に

走ること。確固たる意志に基づいた一步一步の足取りが、意志を超えた形でいつか巨大な総体を生み出すのである。意志を用いて動きを始動させ、意志を手放して動きを推進させること。それは私にとって、規律さや勤勉さと同じように大切なことのように思われた。2017/1/13

654. 研究の新たな方向性とやるべきこと

昨日は、午前中と夕方が同質の闇と静けさを持っていた。二つの鬱蒼とした雰囲気挟まれていたのが、昨日のフローニンゲンの街であったと言っていいだろう。ただし、昼前から午後にかけては太陽が差し込んでいた。そのため、私は気分転換に近くのサイクリングロードにランニングに出かけていた。

ランニングから戻り、午後の仕事をひと段落したところで浴槽に浸かった。すると突然、自分の研究に関して新しい考えが閃いた。それは一週間ほど前に、名古屋から静岡を通過しているあたりの新幹線の中でふと考えていたシンクロナイゼーションという現象に関するものである。

浴槽の中で閃いたのは、どうやら教師と学習者が教室空間で見せる振る舞いには何かしらのシンクロナイゼーションが起こっているのではないかと、いうものであった。シンクロナイゼーションという現象を分析する非線形ダイナミクスの手法を偶然にも先日のクラスで学習していたため、簡便的に研究データに対してその手法を適用してみた。

このデータは、教師と学習者の振る舞いを 7×8 のマトリクスに分類したものであるが、それらの振る舞いを再度時系列データに変換して分析手法を適用してみたのだ。するとやはり、教師と学習者間にはシンクロナイゼーションらしき現象が起こっていることがわかった。そこからさらに個別の学習者に着目し、教師とのシンクロナイゼーションの度合いについて分析を行い、シンクロナイゼーションの度合いの高い学習者の特徴は何であり、逆に、シンクロナイゼーションの度合いが低い学習者の特徴は何かを突き止めたいと思った。

具体的には、カート・フィッシャーのスキルレベルで分析した学習の成長率と学習者のシンクロナイゼーションの度合いがどのような関係になっているのかを調査してみたい。ただし、そうした調査をする前に、昨日も少しばかり難航していたのは、フィッシャーのスキルレベルを用いた分析であった。今回は成人のオンライン学習を研究テーマにしており、クラスルーム内での発話を全て定量化する

際に、フィッシャーのスキル分析を適用している。実際に、合計で500個近い発話データのの一つ一つにフィッシャーのスキルレベルを適用している。

これまで長らく発話の構造を分析する発達測定に携わってきたが、フィッシャーのスキル分析をこれほどの量に対して適用することは初めてであり、これまではケーススタディに対する記述された回答へスキル分析を適用してきたという都合上、一つ一つの発話に対してスキル分析を適用するのは初めての試みだと言っていい。

現在、測定者間信頼性 (inter-rater reliability) を確保するために、しっかりとした分析マニュアル (コーディングシステム) を構築している最中なのだが、それをどこまで精緻に作成したとしても、発話の構造分析は構造的発達心理学の枠組みに習熟していないと非常に難解であるため、結局のところ、他の測定者に対して私がガイダンスやトレーニングを提供することになりそうである。

測定者間信頼性を確保するために、何人の測定者で研究データを分析するのかまだ定かではないが、仮に私の論文アドバイザーであるクネン先生が担当してくださるのであれば、彼女に対するガイダンスやトレーニングはそれほど難しくないかもしれない。なぜならクネン先生は、フィッシャーのみならず、ロバート・キーガンの理論を含めた構造的発達心理学の枠組みに習熟しているからである。今日からより焦点を定めていかなければならないのは、分析の基準だろう。

明瞭な分析基準を設定し、他の測定者がそれほど頭を悩ますことなく分析に従事できるようにしていく必要がある。ここさえ突破できれば、定量化されたデータに対して、非線形ダイナミクスの諸々の手法をいかようにも活用できる。これは非常に楽しみだ。2017/1/14

655. 秋からの進路について

今日は午前中の仕事を済ませ、昼食後に買い物を兼ねて近所を散歩しに出かけた。午前中はあいにくの雪模様であり、午後からの晴れ間を見計らって外出をした。正味10分ほど晴れ間に恵まれたが、途中から粉雪が舞い始めた。折り畳み傘を広げると、粉雪が傘と触れ合う音が静かに聞こえ始めた。その音を聞きながら、欧州での生活を始めてのこの六ヶ月の時間の経過の早さに改めて驚かされた。毎日が過ぎ去る速度が驚くほどに早いのだ。それでいて自分の内側の流れは、非常

に緩やかに流れているのがわかる。外側の時間の流れと内側の時間の流れが歩調を異にしているということが、最近とりわけ強く意識される。

散歩に出かける前に、今年の夏にプログラムが終了した後のことについて少しばかり考えていた。具体的には、フローニンゲン大学で探究を深める分野を明確にし、どのプログラムに在籍するのかを決めようとしていたのだ。現在のプログラム修了後、もう一年フローニンゲン大学に残ることになれば、欧米で取得する三つ目の修士号となる。修士号を収集しているわけでは決してなく、適切な時期が来れば欧米のどこかの大学院の博士課程に進学しようと思っているのだが、今はまだその時期ではない。

自分の仕事を進めながら、自身の関心に沿って探究を進めているうちに、結果として三つ目の修士号取得に向かいつつあると言うだけの話である。散歩前に自宅で情報を精査していたのは、三つ目の修士プログラムを何にするかということであった。実はフローニンゲン大学に入学する前から、フローニンゲン大学では少なくとも二つの修士号を取得しようと考えていた。現在は、もっぱら人間の発達に関して、複雑性科学のダイナミックシステム理論を中心とした観点で探究を進める修士課程に在籍している。

現在のプログラムを通じて、人間の知性や能力を動的なシステムとしてみなしながら研究を行う理論と手法を数多く学ぶことができている。その事実に対しては、これ以上ないぐらいの満足感を覚えている。同時に、ダイナミックシステムアプローチに関してより理解を深め、非線形ダイナミクスの手法に関する技術をより洗練させていきたいという思いが強くあり、たった一年でフローニンゲン大学を離れることは非常にもったいないと思っている。

そのため、仮に次のプログラムが何であったとしても、ダイナミックシステムアプローチに関する優秀な専門家が集まるフローニンゲン大学に在籍することを通して、そうした専門家と協働しながらダイナミックシステムアプローチの探究を真剣に継続させていきたいと思う。ダイナミックシステムアプローチの探究と並行して、ネットワーク科学の観点から人間発達を探究したいという思いが日増しに強くなっている。こうした思いを強くさせたのは、私が在籍するプログラムの代表であり、私のメンター役を務めてくれているルート・ハータイ博士の研究を見てきたことにあるだろう。

彼がいくつかの論文の中で紹介している「ダイナミックネットワークアプローチ」という手法を初めて目にした時、これは実に面白く、応用範囲が広い手法だと思った。彼の研究に感化され、実際に、最初の学期の最中に、社会学学科の「ネットワーク科学プログラム」のコースをいくつか履修したいと考えていたのだ。

しかし残念ながら、私が在籍する今のプログラムの兼ね合いと自分の研究との兼ね合いもあり、それらのコースを履修することができなかった。ネットワーク科学の理論と研究手法を学べるコースは二つあり、三つ目の修士課程の選択科目として是非ともそれらの二つのコースを履修したいと思っている。そのような思いから、選択科目の自由があり、現在行っている成人のオンライン学習の研究に加え、実務で携わっている成長支援コーチングの実証研究も進めていけそうなプログラムは、「産業組織心理学」だと結論づけている。

そして、もう一つ可能性として残しているのが、前々から関心のあった「実証的教育学」というプログラムである。どちらも一見すると、全く関係のないプログラムのように思えるかもしれないが、どちらも共に、人間発達という私の一つの関心事項に強く紐付いたものであることに変わりはない。

ただし後者のプログラムは、オンライン学習、学習理論、教育心理学に関する理解を深められる機会がある一方で、選択科目の自由がきかないため、ネットワーク科学やコーチング心理学に関するコースを受講することができないという制約がある。結論として落ち着いたのは、とりあえず両方のプログラムに出願し、結果が出てから最終的な判断を下すというものであった。まずは何としてでも、もう一年間フローニンゲン大学に残って研究と仕事を進めることができるようにしたい。2017/1/14

【追記】

実際に、その年の秋から「実証的教育学」のプログラムに進学することになった。依然として私の中にはネットワーク科学への関心が強くあるが、それらを本格的に探究するのは今ではなく、もう数年先になりそうだ。

今は単独でコーチングの効果に対する実証研究を行う予定はないが、もし協働研究の話があれば是非その研究にも着手したいと思う。この一連の日記で書かれていることが次々に実現されていく中で、この秋からの活動拠点についてはまだ決定されていない。私の中では一旦欧州を離れ、再

度米国に活動拠点を移したいと考えている。仮にこの秋から米国に戻ることになったら、今度は以前の四年間よりも長く米国に滞在するような予感がしている。そして、米国でしばらく探究活動に従事したら、再び欧州に戻ってきたい。もうその時のことは今から全くわからないが、ノルウェー、ハンガリー、イタリア、イギリスあたりが活動の候補地になるだろうか。天命を待ち、天命に従うのみである。フローニンゲン:2018/4/5(木)15:18

656. ザルツブルグでの第七回「国際非線形科学会議」へ向けて

今日もまた大きな偶然に見舞われた。午前中の仕事の手を休め、本日まだ一度も開いていなかったメールを確認すると、一通のメールが届いていた。それは、この春にザルツブルグで開催予定の第七回「国際非線形科学会議」の案内であった。

フローニンゲン大学で今学期に履修中の「複雑性と人間発達」というコースの中で、非線形ダイナミクスの研究手法をいくつか学び、それらの応用方法に目を開かれるものがあつたため、このところ非線形ダイナミクスの論文や専門書に目を通すことが多かった。非常に力を入れて探究をしていた分野だけに、今回の案内はとても嬉しい知らせであった。

私が今回の国際会議に引き寄せられたのかもしれないし、今回の会議が私に引き寄せられたのかもしれないと解釈した。いずれにせよ、何かの分野と真摯に向き合い続けていれば、必ずどこかで新たな扉を開く機会に出会うことができるのだと思った。

今回の会議の案内が届いた時、直感的にこの会議に自分は参加する必要があると思った。これまでの人生において、いくつかの重要な決断を迫られることがあつたが、それらの重要性が高ければ高いほど、そしてそれらが自分の想いに合致したものであればあるほど、決断に迷いが生じるようなことはほとんどなかった。これは、人生の意思決定における面白い点である。私がこれまで迫れてきた決断の種類はさほど多くなく、代表的なものは、単に新たな環境に飛び込むのか否かの意思決定である。

新しい環境に飛び込むことに迷いが生じるようでは、その環境はさほど自分にとって重要ではなく、ましてや自らの人生を深めてくれるようなものでもないと思う。成人になると、確かに経済的・社会的なことを考慮しながら新天地への挑戦を考慮しなければならないだろう。しかし、私はいつも、自分

を捉えて離さない新天地へ飛び込むことを即断即決した後に、そうした経済的・社会的な問題について対応策を考えるようにしている。

往々にして、経済的・社会的な問題を先に持ってきて、新天地への挑戦を判断のふるいにかけるようでは、新たな環境の中で変容を起こすための突破力や突進力が生み出されることはないと思う。今回の国際会議は、新たな環境の中で何かに挑戦することでは決してないが、上記のようなことをふと思った。

会議の参加を決意した後に、三日間にわたって行われるこの会議の発表担当者リストを眺めていた。するとここでも偶然ながら、先日の日本への一時帰国の際に、行きの機内で取り憑かれるように読んでいた“Nonlinear Dynamical Systems Analysis for the Behavioral Sciences Using Real Data (2011)”の代表編集者を務めるステファン・グアステロ教授の名前が、発表担当者リストの一番上に記載されているのをすぐさま発見した。

本書を常に書斎の仕事机の脇に置き、非線形ダイナミクスの手法に関して何か調べ物をしたい時には、まずこの専門書を開くことが最近の習慣になっていた。それぐらい、本書は今の私にとって重要な研究書である。これも何かの縁であり、その会議に私をいざなう何らかの力が働いているような気がしてならなかった。

最後に、この学会の開催地について言及しなければならないだろう。今回の学会の開催地は、オーストリアのザルツブルグである。ザルツブルグは、モーツァルトや20世紀を代表する指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンの生誕の地として非常に有名である。実は、私は高校時代の時からザルツブルグをいつか訪れてみたいと思っていたのだ。そのきっかけを作ったのは、私の父の存在である。

父は仕事の関係でザルツブルグに訪れたことがあり、その話をよく聞いていたのだ。特に印象に残っているのは、ザルツブルグから少し北上したところにある聖ニコラウス教会についての話である。この教会は、『きよしこの夜』が誕生した場所でもあり、実際に父はその場所で、この曲を聴く機会に恵まれたそうだ。その時に父が味わった感動は、父からの間接的な話ながらも、私に強く伝わってきたのを覚えている。

それ以降、頭の片隅にザルツブルグという街が、自分とは切っても切り離すことのできない意味を帯びた場所となっていたのだ。今回の学会へ参加することを決定付けたのは、もしかすると非線形ダイナミクスに対する私の関心以上に、ザルツブルグという場所が私にとって意味することの大きさによるものなのかもしれないと思わずにはいられない。

日常に起こる諸々の偶然と恩寵的な出来事に対して、その意味を自分なりに解釈しながらも、結局のところ、いつもただただ祈りに似たような思いで感謝の意を捧げることしかできない。理解の範囲が及ぶ地点までは徹底的に言葉を紡ぎ出し、理解の範疇を超越する恩恵に対しては、沈黙と感謝の念の中で祈りを捧げることしかできないのかもしれない。それは、理性的かつ超理性的な特性を持つ人間の本質的な行為の一つなのかもしれないと思う。

先日言及したように、昨日の一時帰国の際に受け取ったニッサン・インゲル先生の絵画作品の中には、バッハ、ベートーヴェン、モーツァルトの音楽世界が表現されている。振り返ってみると、昨年の夏に訪れたライプチヒで、私はバッハ博物館へと足を運び、バッハという偉大な音楽家が少しばかり近い存在になったことを感じていた。

今回は、ザルツブルグに滞在し、モーツァルト博物館へ必ず足を運びたいと思う。最後に訪れるべき場所は、ベートーヴェンの生誕地であり、ベートーヴェン博物館のあるドイツのボンだけとなった。いつかこの街へ訪れる機会がやってくるような気がしている。今から、四月の国際学会が待ち遠しい。2017/1/14

【追記】

この日記を読んで私はひどく驚いた。少なからぬ身震いをした。昨年の四月にザルツブルグで行われた学会の背後には、そのような偶然の網の目が存在していたのだ。2017/1/14の午前中に偶然に開いたメールによって、この学会に参加することを決意させたその前にも、2016年の年末にこの学会の主催者であるステファン・グアステロ教授の書籍を読んでいたのだということを知った。また、そんなことよりも遙か以前、私がまだ高校生だった頃に、父からザルツブルグの話を聞いていたことが、今回の学会参加に決定的な影響を与えていたということも分かった。人生とは何なのだろうか？かくも偶然が一つの織物のように重なり合うものなのだろうか？おそらくそうなのだろう。それがこの現実世界の縁起と呼ばれるものなのかもしれない。

私はその年の四月にザルツブルグに足を運んだ。私のことを昔からよく知る人は、これ以降の私に対してきっと笑うに違いない。なぜなら、このザルツブルグでの学会を終え、ザルツブルグでのホテルを出発して最寄り駅に向かう最中の横断歩道で、自分が作曲家「である」ことに気づいたからである。音楽の素養もなければ、楽器の演奏経験も皆無である私が、作曲家に「なろう」ではなく、作曲家「である」ということに横断歩道の上で突如気づいたからだ。

この常軌を逸した気づきに当初私も戸惑い、その後数ヶ月間はその気づきにあえて蓋をしていた。なぜなら、その時の私は自分自身を科学と哲学を探究する人間だと思っており、日本企業と協働する実務家であると思っていたからだ。つまり、自らが芸術活動に参画することなど当時の私は一切考えていなかったのである。その時の私の自己認識がいかに狭いものであるかに気づかされる。別の表現で言えば、一人の人間は自分が思っている以上の可能性を秘めた存在なのだということを改めて知る。

もう一度、「発達 (development)」という言葉の語源を思い出そう。それは、内側から外側に開くという意味だ。自己の可能性が内から外に少しずつ開かれていくのが発達の本質的な姿なのだ。当時の私はどれだけ狭い度量衡で私という一人の人間を捉えていたことか。

ザルツブルグでの得体の知れない啓示的な気づきを得て数ヶ月してから、私は本当に作曲実践を始めた。もう私は毎日作曲をしなければ生きていけなくなった。必然的な偶然が重なった織物の中で生きること、つまり縁起の世界の中で真に生きることがいよいよ本格的に始まったのだと思う。私がザルツブルグに行ったのは、非線形ダイナミクスという科学に引き寄せられたのではなく、音楽に引き寄せられたからなのだ。一人の人間が真に人間らしく生きるというのはこういうことだったのだ。

フローニンゲン:2018/4/5(木) 15:41

657. ザルツブルグと人生の舵

今日は正午過ぎに、突発的に大きな粒のあられが降った。窓に激しく打ち付けられるあられを見ながら、春にザウツブルグで開かれる国際会議に思いを寄せていた。今日の当たりにしている冬の景色の影響だろうか、春のザルツブルグはどのようなものなのかを想像しただけで、心踊る気持ちにならざるをえなかった。以前の日記で言及したように、今回の国際会議の参加には、様々な偶然が

重なっていた。そうした偶然に偶然を重ねた産物が、今回のザルツブルグ行きだったのである。この国際会議は、四月の六日から八日にかけて開催されるのであるが、ここでも偶然ながら、その前後の私のスケジュールがぽっかりと空いていたのだ。

そのおかげで、ザルツブルグに行く前に、音楽の都であるウィーンに立ち寄ろうと思う。ウィーンに数日滞在し、主要な博物館や美術館を巡り、ウィーンの街がどのようなものなのかをこの目で確認しておきたいと思う。当然ながら、ここで述べているのは、肉体の眼でウィーンを見てくるということのみならず、心の眼や観想の眼を用いてウィーンを見てくるという意味である。表層や外形に囚われることなく、その背後に広がる世界を感じてきたいと思うのだ。

調べてみると、列車を用いてウィーンやザルツブルグに行こうとすると、フローニンゲンからだだと15時間ぐらいかかってしまう。さすがに今回は列車の旅を断念し、飛行機を用いてオーストリアに向かうことにした。非常に良心的な価格の航空チケットが購入できることが判明し、それはアムステルダム国際空港からではなく、ロッテルダムの空港からウィーンに向かうものである。計画としては、ウィーンで数日過ごした後に、列車でザルツブルグに移動し、三日間の国際会議に参加してフローニンゲンに戻ろうと思う。

国際会議の数日後に、外すことのできない所用が入っているため、今回はザルツブルグから他の場所を訪問するのではなく、すぐさまフローニンゲンに戻ろうと思う。今回の国際会議は、非線形ダイナミクスに関心のある研究者や実務家にとって大変意義深いものだと思う。「複雑性と人間発達」のコースを受講している者たちにも今回の国際会議の詳細情報を共有しておいた。フローニンゲン大学の教授や学生が何名この会議に参加するのかは定かではないが、現地で落ち合うことができれば幸いである。

書斎の窓から外を眺めると、先ほどのあられ模様の雪が止んでいた。窓の縁に少しばかり降り積もっていた雪も溶けていた。溶けた雪を見ながら、今の私は、自分の内側の熱と一体化し、熱を通じて日々を生きていることを実感した。そこから思ったのは、もしかしたら私たちは、自分の内側から湧き上がる熱に浮かされていれば、人生の舵を取る必要はないのではないだろうか、ということであった。自己が燃焼を通じて真に生きる時、内側の熱が舵を切り、私たちを必要な場所に導いてくれるように思えて仕方ないのだ。2017/1/14

living(生きること)とlearning(学ぶこと)に何か違いがあるのだろうか?と最近思う。どちらも英語の頭文字が“L”で始まっていることがとても気になっている。単なる偶然だろうが、そこには偶然を超えた何かがあるような気がしている。生きることと学ぶことを切り分けることは、今の私にはできようもない。

生きることは学ぶことであり、学ぶことは生きることであるように思えて仕方ないのだ。私が学ぶ実感を得る時、それは強烈なまでの生きる実感につながっている。そこから、学ぶことと生きることは、私の中で一本の切れない線を成していると言える。

現在私は、人間の発達を複雑性科学のダイナミックシステムアプローチの観点から探究している。この探究アプローチはとても科学的なものである。一方、人間の発達に関して哲学的な観点から探究することも並行して行なっている。

現在所属している環境の都合上、どうしても科学的な論文や専門書を読むことが多いが、時間を見つけて哲学関連の論文や専門書にも目を通すようにしている。つまり現在は、科学的な探究に傾斜する自分がいる一方で、その傾斜が極端にならないように、哲学的な探究を補佐としている自分がいるのだ。

夕食をとりながら、食卓の窓から夜空を眺めると、そこにはひととき強い光を放つ星がきらめいていた。その星の輝きを見た瞬間、自分はいつか、科学そのものを哲学的に探究するような試みに着手し始めることを知った。そして、それは五十代になってからのことであり、欧米のどこかの大学院で、「科学哲学」を探究しているのだと知った。その背後に根拠のようなものは全くなく、これは突然の啓示であり、これからの人生の流れの中でそれは変わりうることなのかもしれない。

ただし、そうした考えが降ってきたということだけは、疑いようもなく確かなことである。それにしても、食卓の窓から見えるあの星は、よく輝くものだと感心させられる。どうすればあのように、太陽の光に埋没することなく、太陽の光を用いて己を輝かせることができるのだろうか。光を見るための眼だけでなく、光の輝きに眼をくらまされることなく世界を見通すための眼をさらに開いていく必要がある。そのようなことを思わされた。2017/1/14

【追記】

この日記に書かれているように、科学哲学への関心は依然として高い。これもネットワーク科学の探究と同様に、今行うものではなく、もう少し後になってから行うべきものだと思っている。今の私の成熟度では、科学哲学を扱うことはできない。教育哲学への関心、複雑性科学と仏教思想との関係に関する哲学的考察、AIと人間発達との関係に関する哲学的考察など、着手してみたい探究テーマが次々に目の前に降りてくる。

全ての探究活動に終わりはないのと同様に、これから自分が従事するいかなる探究活動にも終わりはないのだろう。そうした中で、私のこの人生においてなすべきことは、次の誰かがより広く深く歩きやすくするように、今この瞬間に未開の地へ自ら出向き、その地をほんの少し歩いた過程を記録しておくことなのだと思う。この記録さえあれば、きっと誰かが歩きやすくなるはずなのだ。地図のない場所の地図を少しずつ作ること。自分の人生はそれを行うだけであってもそれは本望である。フローニンゲン:2018/4/5(木)15:59

659. 睡眠の質とこれから

フローニンゲンに戻ってきてから、就寝に向かう準備を始める時間を30分ほど早くすることにした。実際に、夜の九時半あたりから就寝に向かう準備を始め、10時を迎える頃には完全に就寝した状態にしておくと、朝の目覚めが非常に良いことに気づく。私はこれまでも非常に早寝であり、十時から就寝に向かう準備をし始めるのが常であったが、たった30分さらに時間を早めるだけで、随分と睡眠の質に差があることに驚いている。

脳と身体の回復と、その日に獲得した情報の整理に対して、夜の九時半に就寝することは、自分にとってとても良い効果をもたらしてるように思う。夜の十時から深夜の二時にかけて、その時間帯が睡眠の「ゴールデンタイム」と呼ばれている理由が体感的にわかる気がする。この習慣を是非とも継続させていきたい。

今朝すっきりとした目覚めと共に、書斎の窓から景色を眺めた。真っ暗闇の中に雪が降り積もっているのがわかる。まさに、白と黒のコントラストで織り成された世界が目の前に広がっていたのだ。こ

のコントラストは非常に明瞭であり、白黒がはっきりしている目の前の世界と、白黒がはっきりしない現実世界とを対比させている自分がいた。

今日は午前八時を過ぎたあたりに夜が明けた。いつもより幾分早い時間に太陽が昇り始めたことが不思議であった。早朝の仕事がひと段落したところで再び空を眺めると、空の一部が薄桃色になっていることに気づいた。その色はとても優しく、幻想的であったため、一目散に窓に駆け寄ってじっくりと眺めた。

幻想的な空模様の下には、非常に張り詰めた冬らしい空気が漂っている。ピンと張りつめた糸のように、とても緊張感のある空気が辺りを包んでいる。こうした空気は、精神を弛緩させるのではなく、精神を鍛錬するのに適しているように思えた。自然環境の厳しい場所には、精神を研ぎ澄ませるような空気が存在しているに違いない。そのようなことを思わずにはいられなかった。

午前中の大半は、論文を読むことと専門書を読むことに費やした。具体的には、非線形ダイナミクスに関する三本の論文と、サスキア・クネン先生が執筆したダイナミックシステムアプローチに関する専門書の幾つかの章を読んでいた。

文献と向き合うことがひと段落したところで、昨日考えていた今後の進路について再度思いを巡らせていた。やはり今年の探究テーマは、人間の発達をシステム科学とネットワーク科学の観点から捉えていくことにあると思った。この二つの領域を通じて人間の発達を探究していくことによって、また新しい境地が開けるような気がしている。2017/1/15

660. 自然からの恩恵と精神の鍛錬

辺りが一面雪景色に変化を遂げたが、変わらずに毎日を過ごしている。今日は、新年最初のクネン先生とのミーティングがあった。先生とのミーティングは、月曜日の昼食前の11時から行われることが定番となっている。10時過ぎまで自分の仕事を進め、そこから支度をして自宅を出発した。

いざ白銀世界に一步を踏み出してみると、実に新鮮かつ神妙な気持ちに包まれた。自宅の玄関側は、日中の時間帯にはちょうど日が当たらないため、玄関側の道路には雪が多く残っている。溶け

ずに残った雪を踏みしめながら、私は先生の研究室に向かった。私の自宅の近くには、いくつかの運河がある。そのうち、流れの緩やかな小さな運河が凍っていたことに気づいた。

以前、クネン先生から話を聞いていたように、フローニンゲンの真冬には運河が凍り、その上でアイススケートができるとのことであった。先生の話の通りのことが目の前に起こっており、確かにこの状態であれば、運河の上をアイススケートができると思った。なぜだか、そのことに対して少し滑稽に思い、思わず笑みがこみ上げてきた。同時に、一面が雪景色に変貌しているにもかかわらず、それほど寒さが厳しいものではないと感じるようになっていた。

確かに、気温はマイナスなのだが、不思議なことに寒さをそれほど感じないのだ。当然ながら、防寒対策をして外出をしているという表面的な理由もあるだろうが、それ以外に重要な理由がある気がしている。先生の研究室に向かう道中、その理由について考えていた。

白銀世界の中において、朝の太陽光の有り難さが身にしみてくる。そして、優しい冬の太陽光が一面真っ白な雪景色の中でどれほどの美しさを放っていることか。これらはどれも、フローニンゲンの街で生活を始めるまでは経験しようのなかったことである。結局のところ、自宅から一歩足を踏み出した瞬間に湧き上がってきたのは、非常に単純かつ純粋な喜びの感情だったのだ。

こうした喜びの感情が、どうやら外の世界の寒さをはねのけていたようなのだ。この街で毎日を過ごせることは、本当に嬉しい。一見すると陳腐な感情表現だが、それ以上でもなくそれ以下でもないのだ。

フローニンゲンという街で冬を過ごすことによって、自分の思考や身体がさらに引き締まったように感じる。あるいは、研ぎ澄まされてきたと表現してもいいかもしれない。やはり人間は、外部環境から強い影響を受けるのだと改めて知る。特に、自然と人間のつながりには驚きを隠せない。人間が自然を形作るのでは決してなく、つくづく自然が人間を形成してくれるのだと実感する。

温暖な気候は、良くも悪くも、人間の精神を弛緩させるような働きを持つ。一方、寒冷な気候は、良くも悪くも、人間の精神を緊張させるような働きを持つのだとわかる。今の私は、フローニンゲンの冬の寒さによって、精神が程よく引き締められている。こうした適度な精神的緊張の後に、春が来れば

また、精神が和らぐのかもしれない。これが自然のリズムと調和を成しながら精神生活を送ることであり、これが自然によって精神が育まれることなのだろう。2017/1/16

【追記】

フローニンゲンで迎える二回目の冬が今終わりに近づいてきていることを知る。書斎の窓を開けてみると、小鳥の鳴き声が聞こえてきた。よくよくその声に耳を澄ませてみると、「出発だ。出発しよう」と述べているのが分かる。その小鳥はその小鳥自身に対して出発を告げ、周りの小鳥たちにもそれを伝えているのだろう。そして何より、その小鳥は私に対しても新たな出発を後押ししてくる。

今、フローニンゲンの街には燦々とした太陽の光が降り注いでいる。春まであともう少しなのだ。確かに、今日はこれから夜に向けて気温が0度に向かっていく。だが、春は本当にもうすぐやってくるのだ。あの小鳥の声に従おう。それはきっと自分の内側の声と全く同じなのだから。フローニンゲン：2018/4/5(木) 16:12